

ちゅうぎ
 籌木とトイレ遺構

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館



鳥羽離宮跡出土の籌木 第77次調査(伏見区竹田内畑町)

排泄、それは人が生きていく上で欠くべからざる行為である。しかし、事後の処置方法は、地域・時代で様々である。たとえば、日本では紙で尻を拭うが、アジア諸国では、水で流しながら左手で洗浄する。だから、かの地では左手は不浄な手なのである。

さて、古代の人達は用便の際どのように処置していたのであろうか。もちろん、紙は当時高級品であるから用いられることはなかった。民俗例をみると岩手県遠野市や青森県十和田市では、半世紀ほど前まで籌木と呼ばれるもので、尻を拭っていたことが知られている。籌木はチョーギ・カワヤベラ・ク

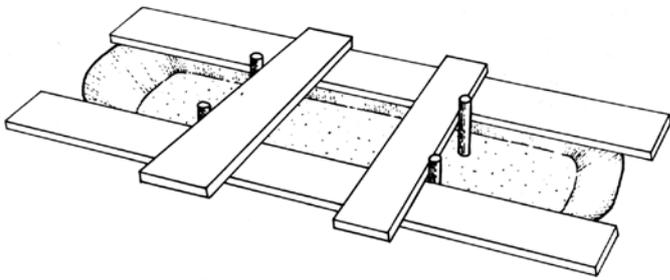
ソベラ・ステボウ・トウカキボウなどともよばれる。

遠野では半世紀ほど前まで、材質が杉の若木の^{まさめ}柁目のものを一家全員で使用していた。製作手順は直径20cm程度の杉の丸太を切り出し、乾燥してから出来上りの長さを20～30cmになるよう切っておく。次に板状に割って、厚さ0.5cm、幅1cm位のものに仕上げていく。これを、便所の箱にきちんと積んでおき、使用後は別の箱にいれ、後で焼いて畑などの肥料にしたのである。

近年、長岡京跡・平安京跡・鳥羽離宮跡などから出土した木製品を検討すると、籌木に似た形状の

ものが多数含まれていることが明らかになった。たとえば長岡京左京三条三坊六・十一町では川跡から多くの板状・棒状の木片が出土している。これらは長さ30cm前後・幅0.6～2.5cm・厚さ0.2～1.1cmで、杉あるいは^{ひのき}檜の割り板がほとんどである。中には表面を削って整えたものも認められる。これらの表面を顕微鏡で観察すると、大半のものから人の寄生虫である^{べんちゅう}鞭虫の卵を確認することができた。したがって、この川跡から出土した木片は籌木として使用されたものである可能性が高いことがわかったのである。

また、平安京右京六条一坊では



藤原京跡の便所遺構

『藤原京跡の便所遺構』奈良国立文化財研究所 1992 年より転載

平安時代末期から鎌倉時代の井戸を 8 基検出した。5 基は縦板組で、3 基は杵のない素掘りの井戸である。うち 2 基の井戸からは、板状・棒状の木片が多く出土している。これらの木片も長岡京跡出土のものと同形状がよく似ており、簀木であろうと考えられる。

こうした例を見ると古代の都においては、用便の際、尻を簀木で後始末をしていたことがうかがえる。

ところで、古代のトイレ遺構の検出例は多くない。最近になって藤原京跡・長岡京跡・福岡市の鴻臚館跡・岩手県平泉町の柳之御所跡などで検出されている程度である。これらには特別な施設はほとんど無く、地面に掘られた穴や溝

に、わずかに足場を固定するための杭が底に認められるのみである。そのためほかの土壌との区別が難しく、それがトイレ遺構の発見を困難にしているのかもしれない。

平安京内では、いまだ古代のトイレ遺構は確認されていない。しかし、右京六条一坊（下京区中堂

寺南町）で簀木と考えられる木片が出土した井戸（径 2.1 m）は、報告では「素掘りの井戸」とされているが、杵がないことや、底に行くほど急激に狭くなること、埋土も有機分の多い黒色土層であることなどから井戸とは考えにくい。そしてトイレ遺構と報告されている鴻臚館跡や、柳之御所跡のものと形状や埋土の状況が似通っている。そのため、井戸ではなくトイレ遺構である可能性が高いと考えられる。断定はできないが、今後、資料の増加にともなって徐々に明らかになっていくことだろう。

トイレ遺構や簀木は不浄のものとされがちであるが、当時の生活習慣を知るまたとない資料である。そればかりでなく、科学的な分析によって、たとえば食物残渣（未消化物）、便所特有の虫（糞虫・蠅の蛹）や寄生虫（鞭虫卵・回虫卵）などから食生活や衛生状態といった、当時の生活環境を知る手がかりともなるのである。

（出口 勲）

参考文献：佐原 眞「食からみた日本史—古代・中世のトイレ—」『VESTA・食文化を考える No. 9』1991 年



平安京右京六条一坊で見つかった「素掘りの井戸」（南から）トイレの可能性はある。